

歴史学系院生による オープン・コミュニティの構築 Tokyo Digital Historyの挑戦

小風尚樹

東京大学人文社会系研究科西洋史学 D3 / 日本学術振興会 DC2





自己紹介

- 19世紀イギリス海軍の歴史が専門
- デジタル人文学：副専攻として5年目@東京大学
(2017年度からTA)
- Tokyo Digital History代表
- Historians' Workshop運営委員



発表の概要

① 問題の所在

③ これまでの主な成果

② アプローチ方法

④ 今後の展望

問題の所在

歴史研究は、単独・少人数がメイン

→ 検証・スピード・基盤構築に困難を生む

98.5% (1304/1323)

2014～15年に日本で成果公開された西洋史学に分類される研究論文の

単著の割合

※『史学雑誌』第123編9号、第124編1号、第124編5号の
巻末文献目録(西洋史)を対象にデータを集計

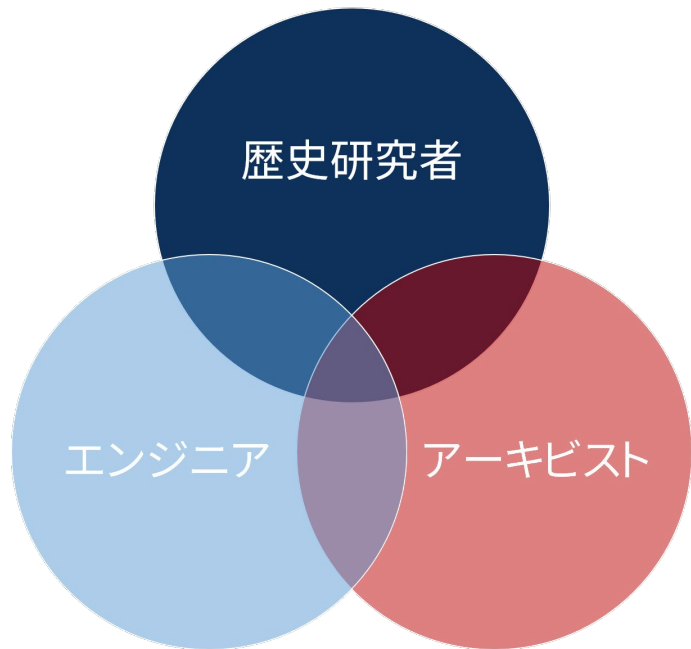
単独・少人数で研究が行われることの何が問題か

- **論証の質を第三者が検証することが難しい**
 - たとえば、外国語の史料翻訳と原文を、第三者が容易に照合できない
- **テンポよく成果を発信することが難しい**
 - じっくり時間をかけた成果への理想と業績評価主義のジレンマ
- **「自分の見つけた情報を共有する」ことを当たり前の習慣とすることが難しい**
 - 「なぜ他の人に見せなければいけないのか？」という意見が世代によってしばしば聞かれる
- **結果、研究成果が生み出されるまでの過程・基盤を学界で共有することが難しい**
 - 公開されても、ほとんどは紙での出版が慣例（データ・ジャーナルなどへの移行が望ましい）

アプローチ方法

学際的協働に基づくグループワークによって、
データ公開がもたらす好循環を示す

ToDH: 歴史研究に関連する三者による学際的協働



歴史研究者は

エンジニアから技術やアイデアを、

アーキビストからメタデータの作法を学び、

プロジェクトを設計

2017年9月から現在まで週1回の定例MTGと勉強会

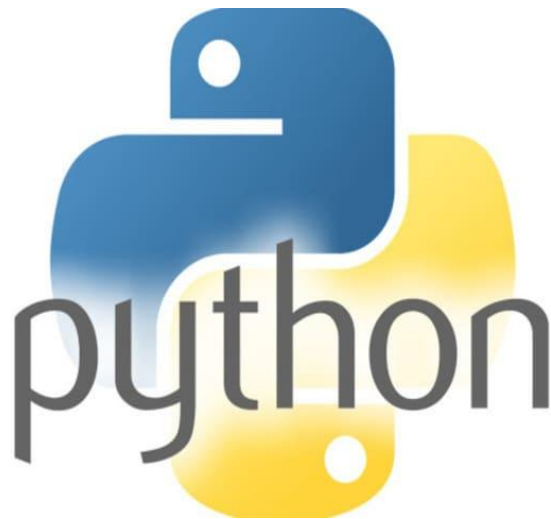
※歴史研究者のスキル・ノウハウ共有を目指す

Historians' Workshopによる後援。親和性が高い

データ公開がもたらす好循環：構造化データと解析



定期的に勉強会やセミナーを開催



これまでの主な成果

シンポジウム開催

国内外の研究基盤プロジェクトとのコラボ

2018 Spring Tokyo Digital History Symposium

開催報告@東大機関リポジトリ



4月にシンポジウム開催



学生奨励賞を受賞
第117回人文科学とコンピュータ研究会



5月19日の日経新聞に紹介記事掲載



ウェブマガジン
『人文情報学月報』での連載開始
(2018年5月号～)

シンポジウムの発表を発展させて
国際学会でのパネル報告を準備中



ToDHメンバーと研究基盤プロジェクトとのコラボ



with 国立歴史民俗博物館
メタ資料学研究センター

代表の小風が研究協力者として
TEIに準拠した日本古代史の
テキストDBのモデル化に参与

with『百科全書』・啓蒙研究会

18世紀フランス科学制度史の山王を
中心に同研究会と国際的な成果発信
を準備中



『百科全書』・啓蒙研究会とは

『百科全書』・啓蒙研究会のホームページはこちら。
すべての知識の集積、権威の権威を手帳である『百科全書』——この手帳の中心と見られ、編纂者たちとこの手帳の編纂を担った人々の関係が、この研究会の中心と見られる。『百科全書』はまた、啓蒙時代のあらゆる知識の集積を力とする大きな集積の中心である。その集積で、本研究会は啓蒙時代を対象とし、分類を問わずあらゆるテーマで学問の発展を支援する。

『百科全書』

2018/04/29
以下の書籍で『百科全書』・啓蒙研究会の出版委員会を行います。
目録：『百科全書』15-20
編纂：京都大学文学部
内容：『百科全書』の出版について

2018/06/11
『百科全書』出版委員会よりTokyo Digital Historyとの合同出版の依頼



with 渋沢栄一記念財団

近代日本経済史の山崎や福田を中心に
渋沢栄一の資料データの活用について
検討

展望

Tokyo Digital Historyには
データ公開から活用に至るノウハウが蓄積
人材や研究基盤プロジェクトをつなぐ場に

まとめ

問題

- 歴史研究は単独・少人数
- 分析手続きが不明瞭
- 成果発信にかかる時間と業績評価の間のジレンマ
- 研究基盤が構築されても公開に至らないことも



アプローチと意義

- コミュニティでの成果発信
- 検証可能なデータ活用
- 早い成果発信により学界のフィードバックも迅速に
- 研究基盤の有効な活用例を示し、データ公開を促進